

ISSN2433-2623

日本語文化の研究

VOLUME 1

March 2018

研究論文

年少者の言語能力と学力に関する研究……………宮田好恵・松井洋子・早野慎吾 1

－日本語力と話者意識および生活習慣の関係について－

オタク文化の表現論(1)－コミック景観について－……………早野慎吾 10

(研究ノート)

パチンコ広告の表現に関する一考察……………早野慎吾 22

宗内敦先生の教育論……………保坂三雄 27

(書評)

宗内敦著『エッセイで読み解く 教育・指導のエッセンス』書肆彩光
……………松井洋子 31

立川日本語・日本語教育研究所

年少者の言語能力と学力に関する研究 －日本語力と話者意識および生活習慣の関係について－

宮田好恵* 松井洋子** 早野慎吾***

1. はじめに

近年、JSL (Japanese as a Second Language)、およびFJB (Foreigners of Japanese Birth) 年少者が急激に増加している。JSL とは日本語を第二言語として学ぶ話者で、FJB とは、日本で生まれ育っているが、親が非日本語話者(片親が日本語話者のケースを含む)で、言語形成期の初期から日本語以外の言語とも接触してきた話者のことである(早野・松井他 2008b)。

これまで筆者らの研究グループ¹は、宮崎県および栃木県をフィールドに JSL・FJB 年少者に対する実態調査を行ってきた(井上・早野(2006)、松井・早野(2006, 2007a, 2007b)、佐藤・早野(2007))。さらに早野・松井他(2008a)、早野・松井他(2008b)、早野・田中他(2009)、早野・松井・宮田(2010)では、JSL・FJB 年少者および日本人児童の言語能力に関する研究報告を行ってきた。日本人児童を調査対象に加えたのは、外国人児童生徒と比較するためである。外国人年少者の言語習得状況の実態把握をするためには、比較対象として日本人児童において言語習得がどのような状況にあるのか、詳細な実態を知る必要がある。

今回、日本語能力調査を行った宮崎県の某小学校(日本人児童対象)で、学力試験および生活習慣・学習態度に関するアンケート調査を実施した。日本語能力と学力の関係に関しては既に早野・宮田(2011)で論じた。本稿では生活習慣・学習態度と日本語能力および学力の関係を中心に分析する。

2. 調査概要

対象は宮崎県の某小学校の日本人児童(日本語母語話者)28名(男子12名、女子16名)である²。学年は5年生で、調査項目『新編新しい社会5下』(東京書籍平成18年度版)pp.30-47に使用されている語彙である。調査は、話者自身が「わかる」「わからない」を判定する話者判定調査と、児童にことばの意味を説明してもらい、どの程度理解できているかを調査者が判定する理解度調査の2種類を行った。話者判定調査は215語(項目)、理解度調査は41語(項目)である³。調査期間は平成23年1~2月で、調査時において児童たちは、調査項目に関して学習していない。

比較する JSL・FJB 児童生徒および日本人児童は、早野・松井・宮田(2010)で報告した栃木県真岡市在住の話者である。栃木県の話者を日本人(栃木)とし、今回調査した宮崎県の

*東大和市立第十小学校 **東京福祉大学 ***都留文科大学

児童を日本人(宮崎)と表現する。学力に関しては「みやざき小学校学力調査(小学校第5年生)」(以降、県テストと表現する)を用いる⁴。

3. 語彙力に関する調査から

3.1. 話者判定調査（不理解語彙率 215 語）

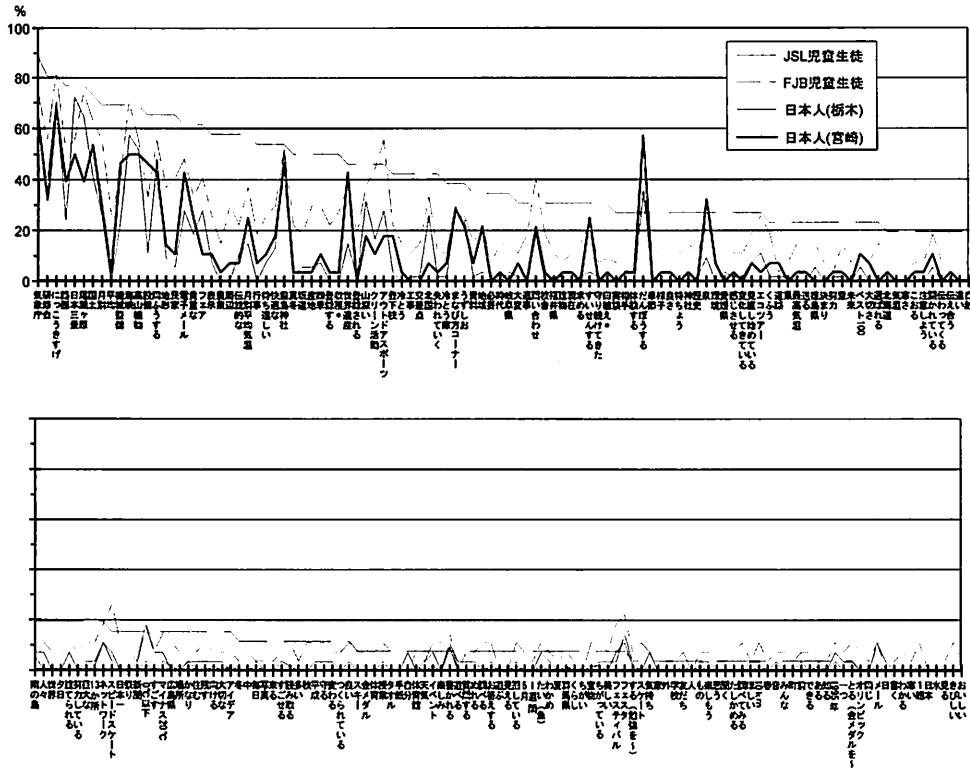


図1 不理解率(215語)

早野・宮田(2011)

教科書語彙の理解度について概説しておく。図1は、早野・宮田(2011)によるもので、215語を使用した話者判定調査で「わからない」と回答した百分率(不理解語率)である。語彙はJSLにとって難易度が高い順に配列してある。日本人(宮崎)、日本人(栃木)は不理解率のパターンが近い。語彙習得過程が近いためと考えられる。不理解語彙の平均は日本人(栃木)12.28、日本人(宮崎)16.32、FJB33.07、JSL50.08となっており、同じ地域(栃木県真岡市)で生育した日本人(栃木)とFJBの違いの方が、日本人(栃木)と日本人(宮崎)の違いよりも大きい。日本での地域的な要素よりも、親が日本語話者か否かが日本語習得に大きな影響を与えてることがわかる。理論的な説明値⁵は日本人(栃木)1.30、日本人(宮崎)1.06、

FJB0.93、JSL0.45 となっており、日本人(栃木)より FJB に近い(早野・宮田 2011)。今回対象とする日本人(宮崎)は、そのような日本語力の話者である。

4. 話者意識と生活

県テストでは「学習や生活についてのアンケート」が実施されている。このアンケートには、授業の好き嫌い、授業のわかりやすさなどの学校の授業内容に関するものから、自宅での学習時間、学習塾への従事、個人の学習形態の好みや読書時間、家庭での生活の様子(朝食を取る、決まった時間に寝る、家の手伝いをするなど)、チャレンジ精神やきまりを守るなど個人的な性格を問う内容も含まれている。

各質問項目は、よくする(1)、まあまあする(2)、あまりしない(3)、まったくしない(4)の4件法となっている。これらのアンケート結果と説明値、県テスト⁶の相関関係をみてみる。調査項目の値をそのまま使用し、数値はピアソンの積率相関係数である。「よくする」が1で、「まったくしない」が4なので、値が正ならば否定の関係、負ならば肯定の関係になる。従って、相関係数を算出した場合、マイナス値が高くなるほど正の相関が高い。なお、*は $p < .05$ **は $p < .01$ で統計的に有意であることを意味する。

4.1. 学習に関すること

4.1.1. 学校や家で勉強してわからないことがあるとき、どうしていますか

回答は次の6項目である。①自分一人でやってみる。②友達に聞く。③家の人に聞く。④学校の先生に聞く。⑤学習じゅく（塾）や家庭教し（教師）の先生に聞く。⑥そのままにしておく。

この項目と説明値の相関は認められない。相関係数の高い項目で⑤が.208、⑥が.218であるが、有意差は認められない。

この項目と県テストでは、⑥でかなりの相関が認められる(相関係数は.590**)。値が正なので、「そのままにしておく」ことを「しない」児童の学力が高いということである。わからないことを「そのままにしておく」ことが学力低下につながっていることがわかる。

4.1.2. 次のことはあなたにどのくらいあてはまりますか

回答は次の3項目である。①とき方（解き方）が分からぬときは、あきらめずにいろいろな方法で考える。②新しく習った漢字をふだんの生活の中で使おうとしている。③遊んでいるときや買い物に行ったときなど、ふだんの生活の中で計算をする必要があるときは、暗算をすることがある。

この項目と説明値の相関も認められない。相関係数の高い項目で②が-.267であるが、有意差は認められない。

この項目と県テストでは①と③に相関が認められる。①が-.458*、③が-.391*である。諦めずに対処することは日本語力とはほとんど関係ないが、学力とはかなりの相関が認め

られる。①と③は真面目さや地道な努力に関する項目と思われる。4.1.1で分析したように、わからないものを放置せずに対処する真面目さが学力向上に最重要であることがわかる。

4.2. 生活に関すること

4.2.1. 一ヶ月に、何さつ（冊）くらい本を読みますか

回答は4件法で次の通りである。①7さつ以上。②4さつ～5さつ。③1さつ～3さつ。④読まない。

この項目と説明値の相関係数は-.568**でかなりの相関が認められる。読書量が多いほど説明値が高くなることがわかる。この項目では、どのような種類の書籍かは聞いていない。小説、ライトノベル、論説等で相違が見られるかは次回の課題である。

この項目と県テストの相関係数は-.529**で、やはりかなりの相関が認められる。この項目は日本語力、学力共にかなりの相関が認められる。本調査においても読書量が日本語力および学力と直結していることが確認できる。小学生の段階で読書習慣を身に着けることが、その後の学力向上に大切なことと考えられる。

4.2.2. 学校以外で、どのようなことをしてすごしますか

回答は次の11項目である。①外で遊ぶ。②テレビを見たり、マンガをよんだりする。③テレビゲームやパソコンなどをする。④本や新聞をよむ。⑤勉強をする。⑥そろばん、習字、ピアノなどのおけいこごとをする。⑦スポーツクラブやスポーツ少年団などの活動をする。⑧公民館や地いきの活動にさんかする。⑨美術館、図書館、博物館などに行く。⑩家の手伝いをする。⑪家族とすごしたり、出かけたりする。

この項目で、説明値との相関係数が高いのは③-.306、④-.249、⑨-.245であるが、有意差は認められない。低い相関がある③④は、文章を読む項目である。文字言語との接触が日本語力に影響したものと思われる。

この項目で、県テストとの相関が認められたものはない。学校以外でどのように過ごすかは、日本語力や学力とはほとんど関係ない。

4.2.3. 家での生活について聞きます

質問項目は次の8項目である。①毎朝、自分で起きる。②朝ご飯を毎日食べる。③学校に持っていくものを、前日か、その日の朝に確かめている。④身の回りのことは、できるだけ自分でしている。⑤勉強する時間を自分で決めて実行している。⑥夜、決まった時間にねる。⑦家族でいろいろな話をする。⑧テレビを見る時間やゲームをする時間などのルールを家人の人と決めている。

この項目で、説明値と相関係数が高いのは②-.309、③-.329、⑥-.308であるが、やはり有意差は認められない。これらは生活習慣に関する項目である。相関係数は高くないが、

規則正しい生活習慣を身に付けている児童は説明値が高い傾向にあることがわかる。

県テストとの相関もほとんど認められず、最も高い②が-.272である。②は低いながらも日本語力と学力で低い相関がある。朝食を取ることの何が結びついているのかは、次の章で述べるが、これは、栄養学的な問題ではなく、生活習慣の規則性が反映したのではないかと考えられる。

4. 2. 4. 自分のことについて聞きます

質問項目は次の12項目である。①ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがある。②むずかしいことでも、失敗をしないでちょうどせん（挑戦）している。③自分には、よいところがあると思う。④しょう来（将来）の夢や目標をもっている。⑤世の中のいろいろなできごとに关心がある。⑥学校のきまりを守っている。⑦友だちとの約束を守っている。⑧人がこまっているときは、進んで助けている。⑨近所の人には会ったときは、あいさつをしている。⑩人の気持ちがわかる人間になりたいと思う。⑪いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う。⑫人の役に立つ人間になりたいと思う。

この項目で、説明値との相関係数が高いのは④の.435*である。つまり、将来の夢や目標を持っている児童ほど説明値が低いことがわかる。普通に考えると目標がある人ほど説明値が高くなりそうであるが、実際はそうならない。この項目は自分の現状をどれだけ認識しているかを確認したものと考えられる。つまり④は、実際に夢や目標を持っているか否かではなく、自分の現状を捉えられているか否かの質問項目であり、現状を捉えられていない児童ほど説明値が低いことになる。夢を語るよりも、日先の課題を確実に解決していくことが学力向上には重要なのであろう。

④は県テストとの相関も.301であり、有意差はないが低い相関があり、夢や目標を持っている（現状を認識していない）話者ほど学力が低い傾向がある。県テストでは③の値が高く、-.440*となっており、説明値と状況が多少異なっている。

4. 3. 多変量解析による分析

説明値との相関係数が.300以上の項目「一ヶ月に、何冊（冊）くらい本を読みますか（I）」「しょう来（将来）の夢や目標をもっている（II）」「学校に持っていくものを、前日か、その日の朝に確かめている（III）」「夜、決まった時間にねる（IV）」「朝ご飯を毎日食べる（V）」「テレビゲームやパソコンなどをする（VI）」を説明変量、説明値を目的変量として重回帰分析（変数増減法）にかけると次の表1のようになる（有意でないものは排除する）。

説明値はIとかなりの相関、II、IIIと低い相関が認められる。単相関係数との差も少ないので、各項目同士の相関も低い。Vの項目が外れている。Vを加えて変数の増加をして計算すると、Vの偏相関係数-.036、F値.026となる。先ほどVに低い相関が認められたのは、朝食でカロリーを補給する等の栄養学的な問題ではなく、朝食を毎朝取るような生活

習慣や性格が影響していると考えられる。VはIIIとかなりの相関があり.418*となる。

表1

	I	II	III	IV	VI
偏相関係数	-.559*	.380*	-.331*	-.259*	-.230*
重相関係数 (R)	.829** 寄与率 (R^2) .687				

*は $p < .05$ **は $p < .01$ で統計的に有意

今回のアンケート項目から、読書量が多く、現実を見て生活習慣が安定している話者の日本語力が高いことがわかる。

県テストとの相関係数が.30以上の項目「一ヶ月に、何さつ（冊）くらい本を読みますか（I）」「しょう来（将来）の夢や目標をもっている（II）」「自分には、よいところがあると思う（VII）」「とき方が分からぬときは、あきらめずにいろいろな方法で考える（VIII）」「遊んでいるときや買い物に行ったときなど、ふだんの生活の中で計算をする必要があるときは、暗算をすることがある（IX）」「そのままにしておく（X）」を説明変量、県テストを目的変量として重回帰分析（変数増減法）にかけると次のようになる（有意でないものは排除する）。

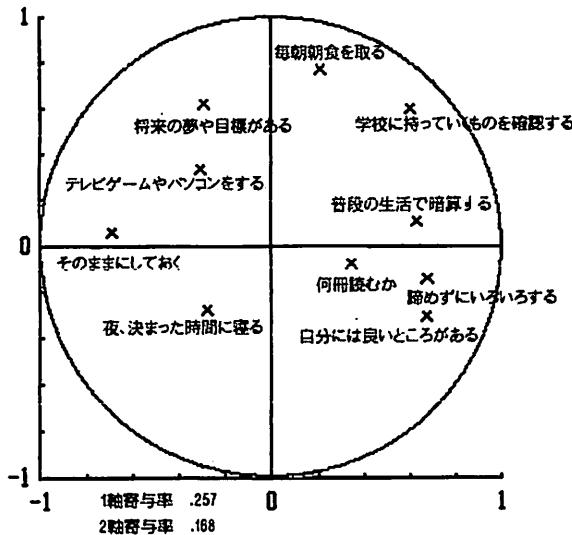
表2

	I	II	VII	IX	X
偏相関係数	-.498**	.335**	-.328*	-.297*	.445**
重相関係数 (R)	.796** 寄与率 (R^2) .633				

*は $p < .05$ **は $p < .01$ で統計的に有意

県テストは I、X とかなりの相関があり、II、VII と低い相関がある。VII、IX、X は真面目で几帳面な性格を反映した項目と思われる。説明値と共にしているのは I と II である。説明値と有効な説明変量はやや異なるが、読書量が多く、現実を見て几帳面な性格の児童の学力が高い傾向があることがわかる。

I から Xまでの項目を主成分分析にかけると図2のようになる。主成分分析(Principal Component Analysis)とは、多くの変数の値をできるだけ情報の損失なしに、小数個(m個)の総合的指標で代表させる方法である。第一主成分はもつともマイナスの値が大きいのが「そのままにしておく」、プラスの値が大きいのは「諦めずにいろいろする」なので、積極性に関する主成分と解釈される。VはIIIと近い位置にあることが、図2からもわかる。



5. おわりに

今回、県テストに付随して行われた「学習や生活についてのアンケート」と、日本語力(説明値)および学力(県テストの結果)の関係について分析した。今回使用した質問項目でもっとも有効であったのは、読書量に関する項目で、日本語力、学力とともにかなりの相関が認められた。将来の夢や目標を持っていると語る児童は、日本語力、学力ともに低い傾向にある。この項目は、自分の現状を捉えられているか否かの項目で、現状を捉えられていない児童の日本語力および学力が低いものと考えられる。早野・田中他(2009)では「日本語力の高い話者は、適切な説明ができる場合に「わかる」と判断しているが、日本語力の低い話者は説明できなくても「わかる」と判定している」(p.48)と論じているが、それと同じ要因であると考えられる。

その他では、几帳面な性格や生活習慣に関する項目で低い相関が認められた。有効な項目は日本語力と学力で違いが見られたが、基本的に読書量が多く、自分の現状を正確に捉えて、生活習慣が安定していて眞面目な性格の児童が日本語力、学力ともに高い傾向にあることが確認できた。

FJBは日本で生まれ育っているが日本人と日本語習得の状況が大きく異なる(早野・田中他 2009 等)。過去に調査した FJB と日本人の差は、保護者の母語だけでなく、生活環境の違いが大きく影響していると考えられる。今後は FJB および JSL の状況も調査し、日

本語能力だけでなく、生活環境を含めた言語習得の要因を分析していきたいと考えている。

【注】

- 1 早野慎吾・松井洋子を中心とする研究グループで、2005年度から継続的に調査および研究発表を行っている。
- 2 この28名は、宮崎県某小学校の1クラス全員である。成績の高い児童から低い児童までいる。たとえば、「教研式学力検査NRTテスト4年用」では平均偏差値21～63までおり、ランダムに近い状態である。
- 3 調査項目に関しては早野・松井他(2008b)で詳しく説明した。語彙の性質に関しては早野・田中他(2009)、早野・松井・宮田(2010)で論じている。
なお、理解度調査には「海峡／産地／につこうきすげ／国土／民家／日本三景／エコツアー／うずしお／山深い／登録／貴重／様子／泉／伝統的／収穫／クリーン活動／電子メール／北国／世界遺産／ベスト100／田植え／特ちょう／自然／歴史／周辺／南の島／農業／冷とう／真冬／未来／くふう／四季／建物／イベント／巨大／場所／春／宝物／マイナス20℃／0℃以下／努力」の41語を用いた。
- 4 学力に関するデータは「平成22年度みやざき小学校学力調査（小学校第5年生）」で国語・社会・算数・理科および意識調査が行われている。宮崎県全体の5年生に対して行われたもので、クラス平均・学校平均・県平均等が出されている。以降、県テストと表現する。
- 5 「説明できない」を0点、「辞書的な説明ではないが、だいたい意味を理解できている」を1点、「辞書的な説明ができる」を2点として数量化した。判定に関しては、松井洋子がすべて行っており、判定者による差はない。
- 6 本稿では、県テストの総合点を使用した。各教科別に分析すれば、早野・宮田(2011)のようにやや違った結果が観察できると思われる。

【参考文献】

- 井上佳代・早野慎吾(2006)「外国人児童生徒に対する教育支援の現状－宮崎地区の調査から－」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』14
- 佐藤和之・早野慎吾(2007)「マイノリティ言語話者への教育支援－JSL児童生徒多人数地域での取り組み－」『宮崎大学教育文化学部紀要教育科学』17
- 白鳥智美・玉井裕子・小澤容子・樋口万喜子(2000)「児童生徒に対する日本語教育のための語彙調査－社会科教科書の語彙－」『2000年度日本語教育学会春季大会予稿集』

- 早野慎吾・松井洋子・小田原恵美子・宮田好恵・佐藤和之・田中利砂子(2008a)「多言語社会における言語教育」『宮崎大学教育文化学部紀要人文科学』19
- 早野慎吾・松井洋子・田中利砂子(2008b)「外国人児童生徒の教科書理解度に関する研究－社会科教科書を用いた語彙調査から－」『2008年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 早野慎吾・田中利砂子・宮田好恵・松井洋子・川添桃・小田原恵美子・田村京子(2009)「外国人児童生徒の文章語理解について－ことばの意味が「わかる」ということ－」『日本語学会2009年度春季大会予稿集』
- 早野慎吾・松井洋子・宮田好恵(2010)「外国人児童の語彙理解に関する研究－社会科教科書を用いた語彙調査から－」『Ars Linguistica』17 日本中部言語学会
- 早野慎吾・宮田好恵(2011)「年少者の言語能力と学力の関係－社会科教科書を用いた語彙調査から－」『Ars Linguistica』18 日本中部言語学会
- 松井洋子・早野慎吾(2006)「年少者に対する日本語教育支援に関する研究－宮崎地区的現状と課題－」『宮崎大学教育文化学部紀要人文科学』15
- 松井洋子・早野慎吾(2007a)「年少者に対する日本語教育支援に関する研究(2)－保護者と家庭環境の調査から－」『宮崎大学教育文化学部紀要人文科学』16
- 松井洋子・早野慎吾(2007b)「年少者に対する日本語教育支援に関する研究(3)－コミュニティにおけるJSL日本語支援モデル構築－」『宮崎大学教育文化学部紀要人文科学』17
- 宮田好恵・松井洋子・早野慎吾(2017)「年少者の言語能力と学力に関する数量的研究－多変量解析を用いて－」第一回立川言語文化研究会研究発表会原稿

(付記)

本稿は、立川言語文化研究会・第一回研究発表会で発表したものに加筆修正したものである。なお、本研究で行った統計処理はすべて早野慎吾作成の多変量解析ソフトHaMASを使用した。本研究においては、日本語力の量化と分析は松井が行い、執筆は宮田が行った。早野は全体を統括した。

(2017年12月29日改稿受理)

The Study on the Relationship between Student's Scholastic Ability and Linguistic Ability — Linguistic Ability・Awareness・Life Habit —

Yoshie MIYATA Yoko MATSUI Shingo HAYANO

オタク文化の表現論(1) —コミック景観について—

早野慎吾
(都留文科大学)

1.はじめに

J R 秋葉原駅周辺や池袋の乙女ロード^{*1}、中野ブロードウェイ、立川駅北口などでは、オタクと呼ばれる人たちの特徴的な文化が観察できる。オタクとは、『日本国語大辞典』(精選版)には、「ある趣味などに凝っていて、他の物事に無関心な若者をいう俗語。相手に対して「おたく」と呼びかけるところから」と解説されている。この解説通り、オタクにはネガティブなイメージが付随している。しかし、以前よりネガティブなイメージは希薄になってきている。また、オタク文化はサブカルチャー(subculture)として確立し、ビジネス的価値が高いことが報告されている(野村総合研究所 2005)。同人誌即売会コミックマーケット(通称コミケ)の一般参加者数が第1回(1975)は700人であったものが、第93回(2017)では約55万人(主催者発表)に増加していることからも、そのビジネス的価値の高さがわかる。

看板・標識・掲示物・張り紙などの公共空間における文字言語活動を言語景観(Linguistic Landscape)という(杉村 1997、早野 2008)。J R 秋葉原駅周辺を代表とする地域では、コミックキャラクター(特に萌え絵^{*2}と言われるキャラクター)を使った看板・掲示物・張り紙などが多く、それらが公共空間を形成しているが、それらは文字言語によるメッセージよりもコミックキャラクターそのものによるメッセージ性が強いものが多い。本稿では、コミックキャラクターを使った看板・掲示物・張り紙などの公共



図1 コミック景観(秋葉原)

空間における活動をコミック景観(Comic Landscape)とし、そのメッセージ性について社会言語学的に分析する。

2. オタクとは

2.1. 「オタク」の語義

オタクとは、先に述べた『日本国語大辞典』だけでなく、『広辞苑』(第6版)においても「特定の分野・物事にしか関心がなく、そのことには異常なほどくわしいが、社会的な常識には欠ける人。」と非常にネガティブな意味で解説されている。しかし、2018年に改訂された第7版では、「社会的な常識に欠ける」の箇所が削除され、「特定の分野・物事には異常なほど熱中するが、他への関心が薄く世間との付き合いに疎い人。また、広く、特定の趣味に過度にめりこんでいる人。」と改訂された。中森(1983)は「マニアだとか熱狂的ファンだとか、セイゼーがネクラ族だとかなんとか呼んでいるわけだけど、どうもしつくりこない。なにかこういった人々を、あるいはこういった現象総体を統合する適確な呼び名がいまだ確立していないのではないかなんて思うのだけれど。それでまあチョイわけあって我々は彼らを「おたく」と命名し、以後そう呼び伝えることにしたのだ。」と、オタク発生の状況を記述している。1989年の東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件において、犯人として逮捕された人物がオタクとしてマスコミ報道されたため、オタクは、病的で社会的な常識に欠けた人物というイメージが作られた。しかし、1990年半ば以降、オタク文化と考えられてきた日本のアニメやゲームの価値が世界的に認められるようになり、ネガティブなイメージは徐々に失われ、『広辞苑』の解説も変更された。

図2は、青山剛昌(1994)『名探偵コナン』の第一話「平成のホームズ」のカットである。毛利蘭は、幼なじみで高校生探偵の工藤新一を「推理オタク」と表現している。ここでの「推理オタク」とは、推理以外には関心を示さない工藤新一を揶揄した表現である。現在でも、特定の分野・物事にしか関心を示さない人物への揶揄表現として「オタク」は使われるが、社会的な常識に欠けた人物という意味はあまりない。また、現在では「他の物事に無関心」の意味もなく、「専門家」の謙譲表現として使われることもある。次の発話は、八王子にあるオーダーメイド靴店で筆者が靴を注文した際に店主が発したものである。

「まあ、いわゆる靴オタクですから、靴へのこだわりは強いですね(2015年11月)」
この場合、自ら靴のスペシャリストと表現するのがはばかられるので、謙遜して靴オタクと表現したのである。オタクとはコミック・アニメ・PCゲームなどの分野の愛好者



図2 『名探偵コナン』

に対して使われていたが、現在では分野を特定せずに「〇〇オタク」のように使われ、その分野の「熱狂的愛好者」を意味する。以前では高年齢の行っているイメージの強い「盆栽」などを愛好していてもオタクとは表現できなかつたが、現在では「熱狂的盆栽愛好者」との意味で「盆栽オタク」と使える。「推理オタク」「靴オタク」などは、その例である。「〇〇オタク」との造語法が可能になったことで、「マニア」との違いが希薄になった。

オタクとは、ある特定の分野に関するくわしい知識を有する点において、マニア、スペシャリスト、エキスパートなどと近い。『日本国語大辞典』(精選版)では、マニアは「ある一つの事に熱中すること。また、その人。」、スペシャリストは「特殊な技能、能力を持っている人。専門家。」、エキスパートは「ある分野でじゅうぶん経験を積み、高度の知識、技能を持った人。熟練者。」と解説されている。

オタクは、スペシャリスト・エキスパートなどの概念に対して、知識の社会的有用性において区別することができる。また、オタクとマニアは、付随するイメージにおいて区別することができる。マニアよりも熱狂の度合いが低いファンを含めて、その知識の社会的有用性とイメージを軸に、オタク、マニア、スペシャリスト、エキスパート、ファンをプロットすると図3のようになる。オタクは、スペシャリストの謙遜表現としても使われるるので、スペシャリストの下位に位置づけることもできる。

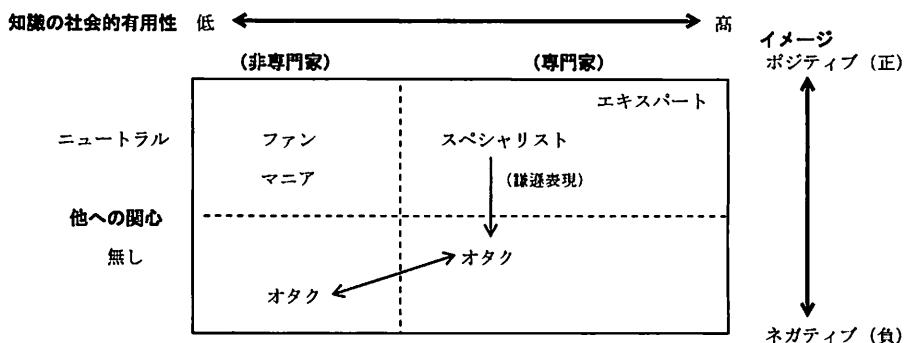


図3 オタクとその類義語の関係図

(1) 知識の社会的有用性について

スペシャリストやエキスパートは、研究分野や事務分野など社会的に有用とされる分野の専門知識を有しており、職業として成り立つことが前提となる。たとえば、転職・求人サイトでは「〇〇スペシャリストとはどのような職業なのか」(エン転職)などの表現が見つけられる。「〇〇のスペシャリスト」「〇〇のエキスパート」といえば、その分野での専門職であることを意味しているが、オタクやマニアは職業とは無関係である。「鉄道オタクってどんな仕事なのか」「鉄道マニアってどんな仕事?」などの文は意味的に成り立たない。つまり、オタクやマニアは個人の関心事に重点が置かれており、その知識に社会的有用性は問題にされない。

この知識の社会的有用性は、消費に対する見返り(報酬)につながる。オタクの消費活動は高い。野村総合研究所(2005)では、コミック、アニメなどの主要 12 分野におけるイン

インターネットによるアンケート調査(2004年8月実施、10,003サンプル)からオタク層の市場規模は12分野全体で延べ172万人、金額にして約4,110億円に達すると推定している。スペシャリストやエキスパートも、専門知識を得るために消費活動を行うが、それ以上の収入が得られる事を前提としている。つまり、スペシャリスト・エキスパートは収入を前提とした概念であり、オタク・マニアは消費を前提とした概念といえる。

(2) イメージについて

マニア・スペシャリスト・エキスパートは、「他の事物への関心」の有無が問題にされることはなく、オタクと他の用語を区別する大きな基準となる。スペシャリストとエキスパートは、専門家の範疇に入りプラスのイメージを有する。マニアックが「一つの事に異常に熱中しているさま」(『広辞苑』第7版)と解説されているように、マニアはやや負の側面を伴っているが、「社会的な常識には欠ける」という要素はない。明確な負のイメージがあるのはオタクだけである。

概念的には、オタクはマニアの中でも特にネガティブイメージを持った属性であり、マニアの下位概念に分類できる。マニアは熱狂的なファンのことであり、ファンの下位概念に分類できる。筆者は、オタクを「特定の分野や物事や趣味にのめり込んでいる愛好者」と定義し、趣味に対する熱狂の度合いからそれぞれを次の図4のように分類する。

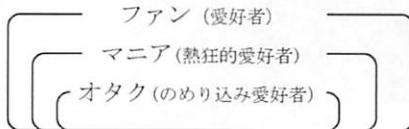


図4 オタクの位置づけ

3. コミックを活用したイベント活動



図5 カードラリーマップ



図6 多摩モノレールの切符
多摩モノレールでは2013年に劇場版『とある魔術の禁書目録』のキャラクターを使ったキップを販売したことのある(図6)。

オタク文化は、地域振興(町おこし)に使われることもある。ここでは、オタク文化と考えられていたコミックの活用例として立川市のイベントを報告する。現在、立川市では「たちかわ楽市」や「立川あにキャン」などがコミックを活用したイベントとして開催されている。「たちかわ楽市」は、世界ふれあい祭や農産物の販売、アニメイベントなどが行われ、2017年は2日間で102,000名の来場者を集めた。そこでは、立川が舞台となっているアニメ『とある』シリーズ^{*3}と立川市のコラボ企画として『とある自治体の地域振興(プロモーション)』と銘打ったイベントが行われた。そのひとつにカードラリー(立川市の参加店舗に行くとオリジナルカードがもらえる)がある(図5)。多摩モノレールでは2013年に劇場版『とある魔術の禁書目録』のキャラクターを使ったキップを販売したことのある(図6)。



図7 コミック景観(自販機・フラッグ)



図8 コスプレイヤー

『とある自治体の地域振興』開催時、立川駅周辺では様々な場所で『とある』のコミック景観(図7)や『とある』関連のコスプレイヤーが観察できた(図8は『とある』に登場するアクセラレータのコスプレ)。また、『とある』とのコラボ商品も販売された(図9)。



図9 『とある』のコラボ商品(菊川園)



図10 「あにきゃん」パンフレット



図11 コミック景観(フラッグ)

「立川あにきゃん」は、アニメの聖地⁴のひとつである立川駅北口をキャンプ場に見立て、ステージイベント、市街回遊イベント、コスプレイベントなどが行われる。2017年は立川が舞台となっているアニメ『フレームアームズ・ガール』のイベントを中心に、声優のトークショーやコスプレパフォーマンスなどが行われた(図10)。

図11～図13は2017年「立川あにきゃん」時に撮影した画像である。図11は『フレームアームズ・ガール』のキャラクターを使ったバナー・フラッグである。図12は痛車とよばれるコミックキャラクターを装飾した自動車で、図13は総合案内の係員であるが、



図12 痛車『ガールズ&パンツァー』



図13 総合案内所

4. 秋葉原のコミック景観

4.1. 巨大な広告

電気街としてしられた秋葉原が 1990 年代に入りいわゆるオタク系専門店(森川 2003)の街に変遷していく(長田・鈴木 2009)。オタク系専門店が多くなるにつれ JR 秋葉原駅周辺(以降アキバ)は、コミック景観で埋め尽くされていく。アキバにおけるコミック景観の特徴的な現象のひとつは、巨大なコミック広告である。図 1 では、巨大なコミックの壁面広告がビルの窓を覆い隠している状態がわかる。図 14 は大通りに面した壁面を劇場版『機動戦士ガンダム THE ORIGIN』と『終物語』の巨大広告、もう片方の壁面では窓をすべてアニメ『ノラと皇女と野良猫ハート』の広告が埋めている。図 15 は、アニメ『艦隊これくしょん -艦これ-』の巨大な懸垂幕である。アキバでは、ぱちんこ店の壁面広告もオタク仕様で、萌えキャラのぱちんこ台(『魔法少女まどか☆マギカ』『ガールズ&パンツァー』)の広告を前面に出し、アキバの街に合わせた壁面広告を行っている(図 16)。図 17 は、同じアキバにある電気店の壁面広告であるが、文字情報だけの言語景観で、コミック

『フレームアームズ・ガール』のコスプレをしている。既に、コミックイベントには、コスプレは欠かせない要素となっている。

コスプレイヤーがオタクに分類できるかどうかは、オタクの定義による。『広辞苑』(第 6 版)では「そのことには異常なほどくわしい」となっているので、この定義ではオタクに分類することは難しい。しかし、筆者は、「自らの趣味にのめり込む」ことがオタクの本質であると考えており、趣味であるコスプレや痛車制作に費用と手間をかけて実践している人はオタクに分類する。

コミック景観が至るところで観察できるようになったということは、一部の愛好者たちだけに受け入れられていたオタク文化が社会的に受け入れられてきたことを意味する。立川市のように、地方自治体が地域振興にオタク文化を活用している意義は大きい。オタク文化が市民権を得た重要な根拠となる。

景観とは明らかに異質である。



図14 巨大壁面広告



図15 懸垂幕



図16 ぱちんこ店の壁面広告

電気店が「カメラ」「エアコン」等の品目のみを提示しているのに対し、図14・図15のコミック広告では、特定の作品の情報を大々的に告知している。その時その時の目玉作品を巨大広告で提示しているのである。コミック系(アニメ・ゲーム等)のオタクは、ある特定のコミック作品に対する思い入れが強く、お気に入りの作品には積極的に消費活動を行う。しかし、特定のコミック作品におけるオタクの数は限られているため、長期的な収益は見込めない。そこで、短期間で目玉となる作品を変えて、別のオタクにターゲットを変えると考えられる。まさに、オタクの性質に合わせたビジネス戦略といえる。

4.2. コラボ企画

次にアキバの特徴として、オタク系専門店でないのにアニメやゲームとコラボ企画を行い、コミック景観が観察できることがある。図18は駅ビル(アトレ)の一階出入り口であるが、ゲーム『ドラゴンクエスト』のキャラクターが描かれている。『ドラゴンクエストXI』とのコラボ企画である。アニメやゲームのコラボ企画は、アキバに限定した現象ではないが、アキバでは非常によく観察できる。コンビニのらん間看板も『ドラゴンクエスト』仕様になっていた(図19)。



図17 電気店の言語景観

バに限定した現象ではないが、アキバでは非常によく観察できる。コンビニのらん間看板も『ドラゴンクエスト』仕様になっていた(図19)。



図18 駅ビルの出入り口(2017/08/02)



図19 コンビニ(2017/08/02)

4.3. 萌え絵広告

萌え絵による巨大なコミック広告について論じたが、小型のコミック広告などは、至る所に観察できる。立川市の例では、立川市が舞台となっている『とある』や『フレームアームズ・ガール』のコミック景観であったが、アキバでは様々な萌え絵による広告が観察できる(図 20 ~図 22)、マッサージ店の看板も萌え絵が使われている(図 22)。「メイドさんによるタイ古式マッサージ」と書かれており、この点もアキバ的特徴といえる。本稿では扱わないが、「メイド喫茶」もアキバの特徴的現象である。



図20 秋葉原広告



図21 アキバ系本屋



図22 マッサージ店

4.4. 言語景観

アキバは外国人観光客が多い事でも有名である。東京都を訪れた外国人の 41.2 %が秋葉原を訪問したと回答し、13.6 %が「一番期待していた場所」と回答している(東京都産業労働局『平成 28 年度国別外国人旅行者行動特性調査』)。多言語表記による言語景観もアキバの特徴である。アルファベット、簡体字、繁体字、ハングルでの表記はどこでも見られるが、アキバではキリル文字も観察できる(図 23)。図 24 は薬局の画像であるが、図 23 や図 24 の画像だけでは、どこの国の店舗なのか判別できない。図 25 はラーメン店の看板であるが、多言語表記と萌え絵が使われており、アキバの特徴が描っている。図 26 は、ぱちんこ店のゴミ箱であるが、「燃えるゴミ」が「萌えるゴミ」と表記されており、ゴミ箱もアキバ仕様になっている。



図23 免税店の言語景観



図24 薬局の言語景観



図25 ラーメン店の看板



図26 萌えるゴミ・萌えないゴミ

強い。文字情報では自らの関心事かどうかの判断にある程度の時間を要するが、コミック広告では、一瞬で自分のお気に入りの作品であるかどうかの判断ができ、インパクトも大きい。そのため、その作品に思い入れがあるオタクにとっては、文字情報による広告よりも効果がある。アキバのコミック景観は、ターゲットがコミック系オタクに特化したことを探る、そのオタクに対して効果的な広告活動が行われている。

萌え絵のコミック景観が図22(タイ古式マッサージ)、図25(ラーメン店)のように、本来「萌え系」とは関係ない業種の広告でも観察できる。この場合、萌え絵を使いながらも文字情報において店の情報を詳細に表記している。これら、オタクとは関係の無い業種でも、場所柄オタクの志向に合わせようとしていることがわかる。

5. おわりに

普段、オタクであることを隠している人を、隠れオタク(野村総合研究所 2005)と呼ぶ。かつてはオタクであることを隠す方が当たり前の時期もあった。しかし、アキバに限らずコミック景観が各地で観察できるようになったのは、一部の爱好者たちだけに受け入れられていたオタク文化が社会的に受け入れられてきたことを意味する。立川市の例は、オタク文化が市民権を得た重要な根拠となる。

本稿ではオタク、スペシャリストなどの概念を整理したが、オタクが高じて創作を始め、それが評価されてスペシャリストになっている人もいる。オタク文化がサブカルチャー(副次文化)からポピュラーカルチャー(大衆文化)になる日も来るかもしれない。

5. コミック景観の意味するもの

アキバの広告関連サイトを見ると「萌え系・アキバ系に特化」等の表現を多く目にする。アキバは「オタク街」と言われるが、分野はコミック系(アニメ・ゲーム・PCなど)オタクをターゲットに特化した街と言える。コミック系オタクに対して、コミック(萌え絵)を使った広告は、文字広告よりもメッセージ性が

【注】

- 1 池袋にあるサンシャイン 60 の西側の通りの通称で、オタク系専門店(森川 2003)が点在しており、ユーザーが女性に偏っているのが特徴。
- 2 「萌え」とは、ある人物や物に対して、深い思い込みを抱くようすをいう若者ことばで、「萌え絵」とは、コミックや PC ゲームなどに特有の絵のことである。田川(2009)では「10 代前半から半ばくらいを連想させる少女の絵であるが、目が顔の面積の半分くらいを占め、口が小さく、顔の輪郭が丸い。どの絵も非常に共通性が高く、メガネ、ねこ耳、メイド服などがキャラクターに応じて付け加えられる」とある。いわゆるコミックの女子キャラクターであるが、身体に比べて顔が大きいのも特徴である。コミックでも劇画などは含まれない。
- 3 立川市(作品上では学園都市)を舞台とした鎌池和馬原作の『とある魔術の禁書目録(インデックス)』『とある科学の超電磁砲(レールガン)』などを総称した名称。
- 4 漫画・アニメなどの熱狂的愛好者らが、好きな作品に縁のある場所を「聖地」と呼び、実際に訪れることを「聖地巡礼」と表現する。

【参考文献】

- 杉村孝夫(1997)「写真に写った方言」『日本語学』Vol.16.6
- 田川隆博(2009)「オタク分析の方向性」『名古屋文理大学紀要』9
- 長田進・鈴木彩乃(2009)「都市におけるオタク文化の位置づけ—秋葉原と池袋を舞台とする比較研究ー」『慶應義塾大学日吉紀要. 社会科学』20
- 中森明夫(1983)「『おたく』の研究(1)」『漫画ブリッコ』6
- 野村総合研究所(2005)NEWS RELEASE 「マニア消費者市場を新たに推計、04 年は主要 12 分野で延べ 172 万人、4,110 億円規模」http://www.nri.com/jp/news/2005/051006_1.html
- 早野慎吾(2008)「文字に書かれた宮崎方言」『地域文化研究』2
- 森川嵩一郎(2003)『趣都の誕生—萌える都市アキハバラー』幻冬舎

(2018 年 2 月 10 日原稿受理)

The Representation Theory of Otaku Culture(1)

— Comic Landscape —

Shingo HAYANO

(研究ノート)

パチンコ広告の表現に関する一考察

早野慎吾

(都留文科大学)

1. ギャンブル依存大国日本

日本がギャンブル依存症大国となっている。平成 29 年 9 月に日本医療研究開発機構が「国内のギャンブル等依存に関する疫学調査」の中間報告を行った（研究代表者：松下幸生）。これは、全国 300 地点、無作為抽出法により抽出した調査対象者 10,000 名（有効回答数 4,685 名）に行われた大規模な調査である。その結果「生涯において、ギャンブル等依存症が疑われる者」の割合は全体の 3.6%（推計 320 万人）であった。カジノが盛んなアメリカ、イタリア、フランス、ドイツでそれぞれ 1.9%、0.4%、1.2%、0.2% で、日本の数値は異常なほど高い。また、過去 1 年に限定した場合は 0.8%（約 70 万人）となるが、それでも高い。

そのギャンブル依存症の元凶は何かというと、パチンコ・パチスロであると考えられている。ギャンブル依存の約 8 割がパチンコ・パチスロ依存で、依存症が疑われる 8 割がパチンコ・パチスロに最もお金を使っているためである（帯木 2014 他）。

そもそも、パチンコ・パチスロがギャンブル依存症の元凶と呼ばれる要因は、パチンコ店の数にある。平成 28 年 12 月時点のパチンコ店舗数は 10,986（警察庁発表）であり、どこにでもある身近さが、ギャンブル参加への敷居を低くしている。全国の市町村数が 1,718（H28.10.10）なので一つの市町村に平均で 6.4 店舗ある計算になる。全国で競馬場は 25、競艇場 24、競輪場は 45 であり、それらと比べるとその多さがわかる。また、パチンコは釘調整（パチスロは設定）で店が出玉を調節できることも依存性を高める要因となっている。

パチンコのめり込みの問題を受けて、平成 24 年に警察庁が府保発第 102 号で「ぱちんこ営業における広告・宣伝等」の取り締まりを徹底して、広告・宣伝表現を厳しく規制をした。この規制で「甘釘」「天国調整」「グランドオープンから〇日目」などの射幸性をあおる表現が禁止された。これはギャンブルへの誘い込み（導入）を抑制する効果がある。

近年、パチンコ店内には「のめり込み注意」の張り紙が貼られ、依存症の相談窓口が告知されるようになった。これはヘル普ラインと呼ばれる予防対策である。パチンコ業界が果たす社会的責任（CSR : Corporate Social Responsibility）の一つである。今、企業では、CSR が求められている。特にギャンブル関連の企業では、高度な社会的責任が求められており、たとえば日本中央競馬会（JRA）では、馬券売上上げの 10%、決算時余剰金の 50% を国庫納付金として納め、社会福祉振興費や畜産振興費に充てられている。社会貢献活動も、（1）地域社会への貢献、（2）乗馬普及・馬術振興と文化の発展、（3）環境への取り組み、（4）特別振興事業等の 4 つを柱に行っている。競輪、競艇、宝くじもそれぞれ高度な CSR を果たしている。しかし、ギャンブル依存症の元凶といわれるパチンコ・パチスロ業界の CSR は、公営ギャンブルに比べて希薄なのが現状である。

2. パチンコ業界に求められるCSR

パチンコ業界にも複数の組織がある。パチンコ店が主の組織である日本遊戯関連事業協会（日遊協）ではCSRとして、（1）社会とのかかわり、（2）環境への配慮、（3）ステークホルダーとの取り組み、（4）アーカイブ、を掲げ（1）で依存症への対応（ヘルプラインの支援）を明示している。

あまり知られていないが、依存症の問題はパチンコ業界で独自の調査・研究が行われている。パチンコメーカーで作られている日本遊戯機工業組合（日工組）が日工組社会安全研究財団（社安研）を設立し、「社会安全に関する研究」「安全事業」などの助成と依存症の調査・研究を行っている。パチンコ・パチスロ依存に関しては、日工組理事長の筒井公久氏（SANKYO）が「業界を挙げて対応していく」（7/28 日刊ゲンダイ）、副理事長の榎本善紀氏（京楽産業）が「健全なファンを増やし、どの業種よりも依存問題の解決に向けて施策を進めていきたい」（9/29 日刊ゲンダイ）との記事を出した。公表媒体がいわゆるタブロイド紙なのでどの程度信頼してよいかはわからないが、パチンコ業界が依存症問題に取り組もうとしていることはわかる。

確かに、ギャンブル依存症の元凶といわれるパチンコ・パチスロで一定の成果を上げれば、大きな社会的責任を果たすことになる。具体的にどのような施策を考えているのか。社安研主任研究員の石田仁氏に話を聞いたところ、「平成25年から全国調査を始めた段階で、その結果から判断する」とのことである。また、石田氏は「研究対象はギャンブル依存全般ではなく、パチンコ・パチスロへの過度のめり込み（依存）」と話すが、これには、依存症問題は解決したいが、パチンコファンが減っては困るというパチンコ業界の実情が絡んでいると思われる。

パチンコ機製造メーカーの京楽産業が「ぱちんこツアーハウス」を行っている。これは、毎回30名程度の参加者が集まって同じパチンコホールでパチンコを打ち、その後宴会を開くという企画で、必ずゲストとして数人のよしもと芸人とパチンコ雑誌編集者（パチンコライター）が参加する。パチンコのヘビーユーザーが集まるのが特徴である。この企画者である京楽産業企画部長の永谷俊介氏は、筆者の質問に対して「ツアーハウスでは、楽しむことを前提にしつつものめり込みに対するケアも行っており、健全な娯楽として遊技して欲しい」と話す。一般にギャンブル依存改善は、一切のギャンブルから遠ざけることから始めるが（田辺 2002・田中 2015）、パチンコは正しい知識を持てばのめり込みは防げるという発想である。「健全な」という表現が微妙である。先ほどの榎本氏のコメントにも「健全な（パチンコ）ファン」とある。

「健全さ」をアピールしようとしているが、そこは無理がある。「健全な喫煙」「健全な飲酒」があり得ないのと同じである。

風営法で何度もパチンコ出玉の規制が行われている。それで、パチンコファンは減るであろうが、依存症対策につながるとは考えにくい。日工組の理事長・副理事長が依存



図1 京楽ぱちんこツアーハウスの入り口

症対策を公言したのであれば、依存症を未然に防ぐ施策や、依存症患者の治療に係る施策に売り上げの何%を使う等の具体的な指針を示す必要がある。他の業種に先駆けて行えば、パチンコ業界に対する世間の見方も変わってくるかもしれない。

3. パチンコ広告の表現効果

ギャンブル依存抑制のために宣伝広告はどのように規制されるべきなのか。まず、パチンコの宣伝広告がどの程度集客につながるかを知らなければならない。筆者は 2017 年 5 月～ 12 月の間でランダムに 35 日選定し、宣伝広告と集客との関係を調査した。調査対象としたのは、西東京マルハン最大の 1151 台を設置しているマルハン東大和店（以降 M 店）である。M 店をライン（ソーシャル・ネットワーキング・サービスのひとつ）登録すると、イベントがあるときは宣伝広告が来るので、そのシステムを利用して宣伝広告と集客数（開店前に並んでいる客数）の関係を検証した。

警察庁による広告宣伝等の取り締まりが強化され、各都道府県の組合でもイベント告知の制限をしており、以前のような「甘釣」「天国調整」のような露骨なあおり表現は制限され、M 店でも「新台入荷」「キタッ!! キタッ!! キターッ!!!!」等のシンプルな告知だけを行っていた。もっとも多い告知は「新台入荷」であるが、その入荷する台数によって「大型新台入荷」「○○台入荷」などの表現を用いていた（図 2）。M 店の代表的なイベントは「7 の日」である。以前は「7 の日」と明記して、女性がスピーカーを持って「キタッ!! キタッ!! キターッ!!!!」と叫ぶ広告がなされていたが、規制により「7 の日」の表記が削除され（図 3）、次に「キタッ!! キタッ!! キターッ!!!!」の表記が削除されて、現在（2017.12）では、図 4 のように女性のイラストだけが残っている。しかし、M 店の客は、あおり表現などなくとも、女性のイラストが送られてくれれば「7 の日」であることがわかる。



図 2 大型新台入荷



図 3 女性イラスト「キタッ!!」



図 4 女性イラスト

今回の調査結果から、集客数と宣伝広告の有無の関係を相関係数(積率相関係数)でみてみると.548**(**は $p < .01$ で統計的に有意)で、宣伝広告と集客にはかなりの相関が認められた。「新台入荷」において、何台入荷するかが店のやる気の表れとも考えられるが、集客数と新台入荷数との相関係数は.256で低い相関がある程度であった。M店の場合、新台入荷数よりも宣伝広告の有る無しが大きいことがわかる。重回帰分析で集客数を目的変量にして、集客要因には何が有効であるかを分析すると表1のようになる。偏相関係数とは、他の変量の影響を取り除いた相関係数である。宣伝広告の数値が積率相関係数より大きく下がったのは、宣伝広告では「7の日」(つまり女性イラスト)の要因が大きかったことを意味する。重相関係数とは目的変量全体の相関係数で、重相関係数の2乗は寄与率(決定係数)と呼ばれ、目的変量全体で集客率にどの程度関与しているかを表している。表1では、寄与率(決定係数)が.777なので、M店では「宣伝広告の有無」「7の日」「休日か平日か」の3要素で集客の約78%が決定していることになる。

表1 開店時の集客要因(M店の場合)

	宣伝広告の有無	7の日	休日か平日か
偏相関係数	.229	.792**	.495**
重相関係数	.881(寄与率.777)		

(**は $p < .01$ で統計的に有意)

M店においては「7の日」が、集客において最も重要な要因であった。派手に「大型新台入荷」とあおるよりも、女性イラスト(「7の日」の告知)の宣伝広告の方が集客には有効であった(「7の日」に新台入荷の告知を行っていることもあるが)。これは、以前からM店が「7の日」に力を入れてきた表れである。

12月16日、M店では新店長が就任の挨拶を行い、やる気をアピールしたところ、その翌日(12/17で7の日)には約千人(前日の約9倍)の客が開店前に並んだ(図5)。パチンコ客は「特別な日=出玉が多い日」という認識があることがわかる。実地調査日35日のうち宣伝広告は9日なので、約4日に1日のペースで送信しており、M店では、約4日に1日のペースで通常と非通常(特別)を区別していることになる。パチンコ店は、特別な日(イベント)であることを表現することによって集客を見込んでいる。そのイベントで、本当に多くの出玉を得てしまった場合など、パチンコ依存症につながると考えられる。筆者は、調査時において釘調整も確認してきたが(釘調整の判断は5段階で筆者が行った)、宣伝広告の有無と釘調整との相関係数は.587**でかなりの相関が認められた。客は「特別な日=出玉が多い日」という認識を持っており、パチンコ店はどれだけ特別な日であるかを印象付けられるかが集客につながるというメカニズムである。

結局、その店をよく知る客に対しては、「特別な日」を印象付ければよいのであり、集客に「甘釘」「天国調整」などのあおり表現は必ずしも必要ではない。M店に通う客には、宣伝広告の規制で「以前よくあったガセイベントがなくなつてわかりやすい」という話者もいた。あおり表現を規制することは、パチンコにあまり関心のない人やライトユーザーへの誘い込み防止には効果があるが、「女性のイラスト」だけで「特別な日」であることが認識できるヘビーユーザーには、ほとんど効果がない。



図5 2017年12月17日、M店1階駐車場に約1,000人の客が集まった。

4. 「勝てる」思考は危険

パチンコ宣伝広告は「特別な日＝出玉が多い日」を客に認識させることが目的である。実際M店では、宣伝広告が入った日は、入らない日よりも釘調整がよい傾向がある。宣伝広告の内容に「勝てる」「出る」等の文言がなくても、「特別な日＝出玉が多い日」という認識から、客は勝てることを期待する。それが集客につながる。ギャンブルとは射幸性の追求なのであるが、「勝てる」ことを期待することは危険である。いわゆるパチンコ雑誌も『パチンコ攻略マガジン』『パチンコ必勝ガイド』『パチンコ必勝本 CLIMAX』など、そのタイトルからして「勝ち」を連想させる。「勝てる」という意識は、ギャンブルの奥にある依存症の恐ろしさを見えなくしてしまう。「パチンコは、負けなければよい」との思考につながるからである。もし、パチンコ業界が本気でギャンブル依存症の対策を考えるのであれば、パチンコメーカーやパチンコ店、パチンコ雑誌などパチンコに関わる業界全体がパチンコ依存症の危険性について、パチンコファンに詳しく伝える必要がある。「のめり込みに注意しましょう」などの但し書き程度では、依存症の恐ろしさは伝わらない。店長がやる気をアピールしただけで前日の9倍の客が開店前に並ぶ状況に、パチンコの恐ろしさがある。筆者は、この現象にギャンブル依存症予備群の多さを感じた。

【参考文献】

- 田中紀子(2015)『ギャンブル依存症』KADOKAWA
田辺等(2002)『ギャンブル依存症』NHK出版
帚木蓬生(2014)『ギャンブル依存国家・日本 パチンコからはじまる精神疾患』光文社

(2018年1月30日原稿受理)

A Research on the Expression of Pachinko Advertisement

Shingo HAYANO

(研究ノート)

宗内敦先生の教育論

保坂三雄

(山梨県教育委員会)

宗内先生の最初の著作である『発達臨床心理学』は、1978年に初版発行されている。この頃は、不登校が増え、非行問題が社会問題になりつつあった時期でもある。宗内先生は、家庭裁判所の調査官としての11年間の非行臨床体験をベースにして、教育の現場に、心理臨床的な知見を導入し、児童・生徒の「問題行動」に対処しようと考えられたものと思われる。

それに続く1980年代は、校内暴力など学校が著しく荒れた時代であった。現場の先生方は、「問題行動」が身近に頻発し、その対応に苦慮する状況になってしまった。

そうしたときに、『発達臨床心理学』は、児童・生徒についてその発達段階から心理臨床的に考察し、「問題」を深く検討し、学校はどのように対応すべきかを示す先駆けとなる適切な指導書となった。

その後、校内暴力は、体育会系の教師を中心に「毅然とした」対応により、影をひそめるようになった。学校は規律を取り戻したのである。しかし、それですべてがうまくいったのではなく、今度は不登校やいじめの増加がクローズアップされ、社会問題となった。

宗内先生は、「うわべだけの力に頼る『毅然たる指導力』というものは一步間違えるとただの権力的、権圧的な指導にすぎなくなり、子ども達を抑圧し、また反抗的にして、様々な問題行動を引き起こす大きな要因ともなることを示している。」と警鐘を鳴らした。

では、現場の教師は、この問題にどのように対処していくべきなのか。宗内先生は、『指導力の豊かな先生』(1988)、『先生出番です！』(2007)を出版する中で解答を示した。

宗内先生は、「教師の指導力というものは、教師がいかなる権威を持ち、そして児童・生徒とどのような関係を結ぶかによって決まるものです」と言う。教師は、児童・生徒に好かれ、尊敬と信頼を得て、そのことが指導力として結実すると言い、そのために次の4本柱を提唱した。

- ① 「専門的権威」：豊かな学識を持ち、それを分かり易く教える技術を持っている。
- ② 「人格性権威」：優しく親切、公平で正義の人であるなど、人格・人間性が優れてい る。
- ③ 「関係性権威」：個々を理解し、ふれあい、指導を受け入れられる関係を作ることが できる。

これらが必要であるが、しかしこれだけでは不十分で、「まだ未熟な“子ども”をある種の規範や基準に従って教育・指導しなければならないという性質上、必然的に「強制性」「審判性」・・・といった関係構造が存在する」と言う。即ち、

- ④ 「統制的権威」：不適切な行動を統制し、指導に従わせる力がある。

児童・生徒は、「教師が管理的・統制的に振舞うことを正当な権限として認めている」という調査結果も加え、「統制的権威」について説明している。

教育・指導関係は、親子関係や、カウンセリングなどの人間関係と違う「専門的関係」であることを強調している。単なる熱血教師は危ういし、優しいだけの教師もこころもとない。愛情と、尊敬を得る中で、いざとなった時に体を張ってでも叱って諫めることができるか、ということであろうか。「強制性・審判性・統制性といった、子どもにフラストレーションをもたらす関係構造をそのまま有益な教育的関係に転ずることを可能にする」という視点・主張は、他の研究者の成書ではなかなかお目にかかるない宗内先生の独自性を感じている。

なお、「体罰」という極端な統制行動については、「教育・指導力とはまったく無縁な暴力行為」として勿論のこと完全否定をしている。

宗内先生の教育論は、親子関係、子育て、非行やいじめなどの広範なテーマにおいて論述されている。発表の場も、学術書はもとより、新聞（朝日新聞の論壇等）、月刊誌（『児童心理』『教育心理』等）、文芸同人誌（『琅』）等と多岐に亘っている。一般の読者をも念頭に置いてか、文章が分かり易い。適切な挿話や事例が豊富であることも特徴である。

親子関係、人間関係、非行やいじめなどのやや特別な人間関係等、「関係」を理解することは非常に難しい。個々別々の個性を持つ人間同士が、いろいろな要因が渦巻く複雑極まりない社会状況の中で、「関係」が生じているとしたら、その関係を読み解くことは非常に難しいということは至極当然であろう。学問を基にして理解することは有用だが、それだけで事足れりとも言い難い。

私の好きな宗内先生の著作に「母と子－厳しさと厳しさと－」『二言、三言、世迷い事』（2011）は、親子関係、子育てを語るときに、欠かせない重要な「関係の在り方」を示している。この関係がどうあつたらよいのか学問的に教示しようとしたとき、抽象的に説明することでは恐らくなかなか理解がし難い面があろう。宗内先生は、この短編の中で、この難しいテーマについてとも簡単に分かり易く、感動的に、その本質を示している。

バスの中、疲れて眠っていた少女は、母の強い意志の元、初老の老人に、席を譲ることになる。固辞する老人と渋る少女。母は、多少の強引きをもって少女を立たせた後、少し離れた場所で、「少女を抱き、謝るように、諭すように」髪を撫でてやるのである。この光景こそ、「やさしさと厳しさ」の在り方を端的に物語っている。母、少女、老人のそれぞれの心の動きを言葉としても表現しているので、小説を読むかのように分かり易く、感動的である。実は、この老人こそ宗内先生その人であった。

難しい事象を、その真髓を示す最適な場面・光景、事例をもって解説する手法を「読み物風専門書」と、宗内先生は称している。宗内先生は、評論、エッセイも手掛け、俳句もたしなむ方。世相を切る評論は痛快であり、大相撲をはじめとするスポーツ評論もその鋭さにはうならせるものがある。宗内先生は、眞偽のほどははつきりしないが、かつての武蔵丸と偶然顔を合わせる機会を得た時、宗内先生の進言が功を奏してか武蔵丸は自らの取り口を変え優勝につながったとする伝説の持ち主である。学者、教育者、評論家、エッセイストとしての論理性と、俳人という豊かな感性が一体となって初めて、難しいことを、その本質部分を抽出して、分かり易く翻訳して「読み物風」に表現してくれるのではないかと感じている。

さらに付け加えるなら、宗内先生の出自、育ちも、その教育論に大きな影響を与えていくと思われる。毛利家ゆかりの家柄でいて寒村に落ち延びた一族という。明治維新により、再興の好機を迎えたものの、敗戦により頓挫。束の間とはいへ貧困生活も経験している。宗内先生の著作を見れば、青春時代は、恋も、やんちゃも怠惰も挫折も赤裸々に記載されている。優等生一直線の人生を過ごしてきたわけでは決してない。大学教授になってからも、持ち前の正義感から上司による不正受験要請を断固拒否するなどにより、上司からの嫌がらせを受けたり、職場同僚たちからのいじめも受け、理不尽な差別に苦しむ辛い時期もあったという。つまり、生活面では上流も下流も経験し、人間関係では被害者の立場も経験している。紆余曲折、多種多様な人間模様を糧にして宗内文学、教育学が成立しているものと思われる。

前出「母と子－優しさと厳しさと－」には後段がある。件の親子と宗内先生を乗せたバスが、終点に近づいたとき、宗内先生はある行動に出た。少女と母のもとに急ぎ近づき、「ありがとう」と感謝の意を伝えた。「さして嬉しそうにもなく、少女は眠気半分の顔で頷いた。私はさらに、今度は少女へともなく、その母へともなく言った。『こんな優しいお母さんに育てられて、きっと、優しい立派な人になりますね。頑張ってね』少女の顔がさっと輝き・・・」先頭を切ってバスを降りる宗内先生の背中に、「明るい少女の声が飛んできた『さようなら』振り返ると、母親に凭れて少女が小さく手を振っていた。つれて母親も手を振ってくる・・・」。微笑ましく、美しく、晴れやかなシーンで、感動を覚えざるを得ない。

この小論の前段においては、「優しさと厳しさ」とのテーマを正に絵に描いたような母子を紹介している。難しい教育学を勉強するより、子育ての在り方を雄弁に教えられる。宗内先生ならではの語り口が生き生きと情況を描写する。このテーマについては、このエピソードの紹介だけで十分目的を達成していると思われる。

しかし、同時に宗内先生の教育論を語るとき、後段で見られた宗内先生自身の行動にも注目したい。母に急かされ眠いのに席を譲った少女の気持ちに思いを馳せる。少女にすれば、愛する母からの指示とはいえ、まだちょっと割り切れない思いがくすぶっていたかもしれない。母や自分にも少しの不満を感じていたのかもしれない。心配したであろう宗内先生の発した一言は、少女をして一瞬に輝かしい表情に変えてしまった。少女は、喜びと誇りを胸一杯味わうことができ、母への愛も利他の精神をも一層深めることになったのではないか。母も宗内先生の言葉に励まされ、わが娘の成長を喜べるひと時にできたのではないか。宗内先生の、相手を思いやる優しさと、適時、適切な判断力・行動力に、宗内先生のいう「人間性」や「指導力」の極意を見せつけられた思いである。

宗内先生の教育論は、教師養成という役割ももつ大学の教授であったことから「教師論」、「生徒指導論」を主軸にされた。その理論は論理的でありながらも、宗内先生の人生経験をも加味された人間的で実践的な理論になっている。それ故、宗内先生の著作は、読んで楽しく説得力にも富んでいる。私自身も愛読者の一人である。勤務校が荒れた時は、宗内先生の著作が指導の道しるべになった。危機を乗り越えるために本当に助けられた思い出がある。宗内先生の教育論の底流にあるものは、「優しさと厳しさ」であろう。親子関係であっても教師生徒関係であっても、共通する宗内理論の要諦となっているものと考えている。

【引用文献・参考文献】

- 宗内敦（1978）『発達臨床心理学』教育科学出版
宗内敦（2006）『十三分の一 怒りつ、念いつ、鎮まりつ』武蔵野書房
宗内敦（2007）『先生、出番です！ 担任教師のふれあい指導』雇用問題研究会
宗内敦（2011）『二言、三言、世迷い言』書肆彩光
宗内敦（2017）『エッセイで読み解く教育・指導のエッセンス』書肆彩光
宗内敦編（1995）『琅』第4号 琅の会
宗内敦編（2009）『琅』第22号 琅の会

（2017年12月31日原稿受理）

The Education Theory of Professor Atsushi Muneuchi

Mitsuo HOSAKA

(書評)

宗内敦著

『エッセイで読み解く 教育・指導のエッセンス』書肆彩光

松井洋子

(東京福祉大学)

先日、都留文科大学の早野慎吾氏から「面白い本がある」と手渡されたのが本書である。どのようなものかと読んでみたが、なるほど面白い。エッセイでわかりやすいかと言えば、そうでもない。専門用語が多く使われている。それでは、専門書かと言えば、そうでもない。エピソードを織り交ぜ、小説のように読み手を取り込む。本書は読み物風エッセイから専門的論考まで多種多様な文章 26 編、親、教師、カウンセラー、教育、指導者の道に真摯に取り組む人々を真正かつ神聖なる専門職へといざなう。

本書は全 255 ページで、目次は以下のようになっている。

- 序 章 教育・指導の原点—優しさと厳しさと
- 第一章 教育の主役は親・教師
- 第二章 学校、教師の問題点
- 第三章 閑話休題・教育時評
- 第四章 適応・不適応の心理
- 終章 教育・しつけ・指導における副作用—過ぎたるは及ばざるが如し

著者は、およそ教育・指導関係なるものは、優しさと厳しさが要の両輪であり、この両輪に支えられていると冒頭で説く。しつけ論で使われる単なる「飴と鞭(甘い面と厳しい面)」ではない。「優しさと厳しさ」である。この考えが本書全般にわたって展開していく。そもそも「教育とは何か」。今も昔もこれからも永遠に語られる「テーマ」である。我々を取り巻く環境も人々の考え方も時代とともに大きく変化し、様々な出来事に暫し、呆然とすることがある。

本書では、多くの事例を通して微妙な内容が発達と適応につながることを論じているが、これは、昨今の教育現場における教育、指導のはがゆさ、もどかしさを乗り越えようと日々葛藤している人々の背中を押してくれるものである。そして何よりも随所に著者の教育に対する熱い「思い」「心」と人としての「信」「真」を感じさせる。その思いこそが教育に必要な根源であると気づかせる。

私自身、日本語教育の現場に身を置き、多種多様な文化背景を持つ留学生を対象に「日本語」習得の指導に日々悪戦苦闘しているといつても過言ではない。言語習得という目標は一見分かりやすく、指導も容易なように思えるが、現実は厳しい。それは留学生たちの異なった国籍・言語・習慣が加わり、言語習得のみならず、生活習慣、日本社会への対応、

そしてその過程における彼らの心の葛藤が第二言語としての日本語習得の理解にも影響を与え、さらに複雑にしているからである。

そのような思いの中で手にしたこの書であるが、心理臨床事例とともに紹介されたエッセイが、ことばでははつきり伝えきれない私自身の微妙な迷いや自信の喪失感に、日々の指導現場での出来事をもう一度振り返ることに気づかせてくれた。私は、「教える」という上から下へといった目線ではなく、「SHAREする、分かち合う」という基本的な姿勢で当初から学生たちに向きあつててきた。教育現場において、教授法などの技術的な指導力はもちろん大切であるが、それ以上に指導にあたる側の人としての心の持ちよう、あり方が問われているような気がしてならない。本書でも、著者は指導者の資質の向上が求められているとしている。つまり指導力の向上である。指導力とは指導者としての社会的認知はもちろんであるが、それ以上に人として「信」「真」、つまり、「信頼」「真剣さ」を備えることにより、指導される側との心のつながりが大切であることを、著者は、臨床心理学の立場から述べている。

著者は、最後に教育現場において指導する側も指導される側も、ほどほどにプラスティションを感じる中で、互いに葛藤しつつ、忍耐力を養いながら、自ら問題を解決し、自己実現を図らせることにより、己の道を見つけていくものであると述べている。これは対象が日本人であろうと外国人であろうと、一人の「人間」として指導者側に身を置くものとして大した「教育の哲学」など不要であるとすると締めくくっているが、同感できる考え方である。

本書の終わりに当たって「過ぎたるは及ばざるが如し」と著者は述べている。通常の枠を超えた発想で、独自的であり、新鮮である。苦難(著者の言う茨の道)を乗り越えるためには非傍に置きたい書である。

著者である宗内氏は、2006年3月に明星大学を定年退職されてから現在に至るまで、精力的に著書を発行されている。頭の下がる思いである。著者が自らのホームページで本書の解説を掲載しているが、最後にその文章を引用する。

いかなる領域であれ、およそ教育・指導関係なるものは、優しさと厳しさが要(かなめ)の両輪。この両輪に支えられ、子どもを乗せて車は走る。しかし、道は必ずしも平坦ではありません。凸凹道もあれば泥沼道もある。どう走るかは、まさに運転者次第です。時には運転を誤って事故を起こし、子どもに大けがをさせ、命を落とさせてしまうことさえある。教育とは、指導とは、そういう茨の道なのです。本書は、多様なエッセイ・論考を取り混ぜて編まれた、いわば教育・指導の副読本。茨の道を乗り越えるためのエッセンスが読み解けます。

(平成30年2月18日受理)

Atsushi Muneuchi :
Understanding the Essence of Education and Guidance through Selected Essays

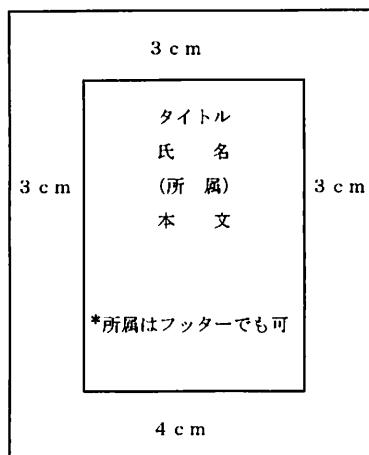
Reviewed by Yoko Matsui

【研究所報告】

1. 平成 30 年 3 月 15 日(木)、公益財団法人日本教育公務員弘済会・平成 30 年度日教弘本部奨励金の贈呈式が行われ、早野代表が出席しました。(於第一ホテル両国 5 階「清澄」)
申請者(代表者) : 早野慎吾(都留文科大学、立川日本語・日本語教育研究所)
共同者 : 松井洋子(東京福祉大学)、宮田好恵・鈴木恵美(以上東大和市立第十小学校)
助成番号 : 17A2-019
助成事業 : 日教弘本部奨励金
後援 : 文部科学省
テーマ : 外国人児童生徒の学力向上のための教材開発に関する研究
助成金額 : 500,000 円
2. 本誌掲載の「オタク文化の表現論(1) - コミック景観について -」および「パチンコ広告の表現に関する一考察」は、都留文科大学学術研究費交付金(250,000 円)による研究成果の一部です。また、「年少者の言語能力と学力に関する研究 - 日本語力と話者意識および生活習慣の関係について -」は、都留文科大学特別教育研究費交付金(400,000 円)による研究成果の一部です。

『日本語文化の研究』投稿規定

1. 本誌は、年一回発行を基本とする。
2. 投稿は原則として会員に限る。
3. 原稿の内容は、言語学・言語教育・民俗学など、ことばに関連があるものに限る。
4. 原稿の採否は編集委員が審査し、決定する。また、審査段階で修正を依頼することがある。
5. 使用言語は日本語または英語とし、横書きとする。
6. 原稿は完全原稿とし、未発表論文(口頭発表を除く)に限る。
7. 原稿の長さは図・表を含め A 4 判サイズで 10 枚を越えないことを基本とする。
8. 原稿の左右・上下の余白は以下に示した例に従うこととする。日本語の原稿は 40 字 × 40 行を基本とする。英語の原稿はダブルスペース、または 1.5 スペースで 40 行を基本とする。原稿の 1 ページ目は、タイトル、氏名、所属をこの順に記し、それに本文を続けることとする。頁ナンバーは、原稿の裏に鉛筆で記すこと。ワードによる電子媒体で投稿する場合は頁ナンバーの記載は不要。



原稿は随时受け付けるが、次号(Vol. 2)の締め切りは 2019 年 2 月末日とする。
送付先(送信先)は立川言語文化研究会事務局まで。

立川言語文化研究会 会則

- 第一条** 本会は「立川言語文化研究会」と称す。
- 第二条** 立川言語文化研究会は立川日本語・日本語教育研究所主宰の研究会である。
- 第三条** 本会は、ことばに関する研究・教育の人たちと連携を図り、研究発表だけでなく、意見交換、情報交換の場を提供するとともに言語文化の研究・教育の発展に寄与することを目的とする。言語文化研究には言語学、日本語教育学、文学、社会学など、言語表現に関わる研究分野を広く含む。
- 第四条** ことばの研究・教育に関心のある人ならば会員となれる。
- 第五条** 本会の目的を達成するために、次の活動を行う。
1. 研究発表会（もしくは研究報告会）の開催。
ウェブ上での研究会は、メーリングリストを使用して行う。
 2. 年一回の研究誌『日本語文化の研究』発行。
 3. その他、講演会、親睦会など本会の目的を達成するために必要な事業。
 4. ホームページによる情報発信。
- 第六条** 本会は下記の役員をおく。
1. 会長 一名
 2. 副会長 二名
 3. 会計監査 一名
- 第七条** 役員は任期2カ年とする。ただし、重任を妨げない。
- 第八条** 本会の経費は、寄付金、交付金その他の収入をもってこれにあてる。
- 第九条** 本会の会費は無用であるが、『言論の研究と教育』に掲載が決まった場合には、掲載料として10,000円を必要とする。
- 第十条** 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。
- 第十一条** 事務局は立川日本語・日本語教育研究所内におく。
- 付記 この会則は2017年5月30日から実施する。

2017年11月4日 一部改訂

日本語文化の研究 VOLUME 1

2018年4月24日発行

編集 立川言語文化研究会

発行 立川日本語・日本語教育研究所

〒190-0012 東京都立川市曙町3-4-20

立川言語文化研究会事務局

電話・FAX 042(848)5131

印刷 ぎょうせいデジタル株式会社

〒192-0012 東京都立川市曙町1-25-12

電話 042(522)3176

ISSN2433-2623

NIHONGOBUNKA NO KENKYU

(Studies in the Japanese Language Culture)

VOLUME 1

March 2018

CONTENTS

Articles

Yoshie MIYATA Yoko MATSUI Shingo HAYANO : The Study on the Relationship between

Student's Scholastic Ability and Linguistic Ability

— Linguistic Ability • Awareness • Life Habit —

Shingo HAYANO : The Representation Theory of Otaku Culture (1)

— Comic Landscape —

Research Note

Shingo HAYANO : A Research on the Expression of Pachinko Advertisement

Mitsuo HOSAKA : The Education Theory of Professor Atsushi Muneuchi

Book Review

Atsushi Muneuchi : Understanding the Essence of Education and Guidance through Selected

Essays (Reviewed by Yoko Matsui)

**TACHIKAWA Research Institute
for Japanese Language and Japanese Language Education**